O-29
同種移植後のアスペルギルスグラクトマンナン抗原偽陽性
○木村 俊一、神田 茂伸
自衛医科大学附属さいたま医療センター 血液科
【目的】同種移植後のアスペルギルスグラクトマンナン抗原（GM）偽陽性の発症頻度とリスク因子を解析することを目的とした。また、GMの絶対値やその推移に着目した。
【方法】2007年6月から2012年12月までの期間で当科で1回目の同種移植を受けた172名が対象となった。GM陽性のエピソード（2回続けて0.5以上、あるいは1回で0.7以上）をProvenあるいはProbable侵襲性アスペルギルス症（IA）の診断を満たす“真の陽性”、臨床所見のない“偽陽性”に分類した。それ以外の症例は“不明”に分類した。
【結果】1年のIとGM偽陽性の累積発症率はそれぞれ、10.1%、48.1%であった。
148回のGM偽陽性のエピソードのうち、偽陽性が97回（65.5%）、真の陽性が23例（15.5%）、不明が26例（19.0%）であった。それぞれの患者での最初の偽陽性のエピソードを対象とした解析では従来（偽陽性37例、除外30例）と比較して偽陽性の発症率が高くなる傾向が認められた。
【結論】GM偽陽性は同種移植後に頻繁に認められた。
GM値の上昇傾向が偽陽性化を高める可能性がある。症例表を検討したが、偽陽性化の頻度において有意差は認められなかった。この結果は、偽陽性的診断において重要な役割を果たしていると考えられた。

O-30
北里大学病院剖検例を対象に深在性真菌症を認めた患者の臨床的背景解析
○甲野 延英、鈴木 裕子、久米 光
1国立国際医療研究センター 血液内科、3北里大学 血液内科、3北里大学 病理学、1福岡医大 軽血移植免疫学講座
【目的】我々は北里大学病院での剖検例の臨床的背景を検討したので報告する。
【方法】2006年より2013年に北里大学病院にて病理剖検が行われた507例（剖検率86.1%）を対象とした。病理剖検で深在性真菌症を認めた48例（深在性真菌症発症率9.47%）のカルテをレビューした。
【結果】アスペルギルス21例（同4.14%）、カンジダ症17例（真菌症発症率3.33%）、クリプトコックス症5例（同0.99%）、ニューモノシス症4例（同0.79%）、ムーコ症1例（同0.20%）であっ
【考察】アスペルギルス21例（同4.14%）、カンジダ症17例（真菌症発症率3.33%）、クリプトコックス症5例（同0.99%）、ニューモノシス症4例（同0.79%）、ムーコ症1例（同0.20%）であっ
【結論】GM偽陽性は同種移植後に頻繁に認められた。GM値の上昇傾向が偽陽性化を高める可能性がある。症例表を検討したが、偽陽性化の頻度において有意差は認められなかった。この結果は、偽陽性的診断において重要な役割を果たしていると考えられた。

O-31
黴菌原因菌Malassezia globosaの菌糸形成条件の至適化
○張 音実、齊藤 知恵、杉田 陽
明治薬科大学 微生物
【目的】Malasseziaは、皮膚、粘膜性皮膚炎（SD）あるいはアトピー性皮膚炎（AD）に関与する皮膚真菌菌である。ADやSDの病状の優位な菌種はM. restrictaであるが、発症ではM. globosaが優位菌種となる。さらに、発症部位の多さに多数の菌形を観察することができる。従って、菌系を示すM. globosaが発症に関する因子を深く理解していたことが考えられる。本研究では、M. globosaの菌糸形成条件の至適化を試みた。
【結果】M. globosaは繁殖系を用いて、各種菌種含有あるいはpHが菌系形成を与える条件を検討した。
【結果】実際に観察9株中、4株が菌糸形成した。菌糸形成誘導剤が最も高い2.71倍について詳細な検討を行った結果、K’とMg2+が菌糸を高率に誘導する。pHについては弱酸性条件（pH7.0-7.5）が最も高率に菌糸を誘導した。したがって、繁殖系を含む発症に貢献する菌種である。本研究では、M. globosaの菌糸形成条件の至適化が可能であることを示すことができる。

O-32
菌糸バランスの制御による皮膚環境の適正化
StephycoccusとMalasseziaの相互作用
○齊藤 知恵、張 音実、杉田 陽
明治薬科大学 微生物
【目的】皮膚には多様な微生物が絶対的なバランスを保持しながら菌糸を形成している。このバランスが崩壊すると様々な疾患を引き起こすことが予想される。皮膚バランスの不調は無菌ならばではなく、菌糸の律動的変化が原因であると考えられる。ヒト皮膚において、菌糸がMalasseziaで、細胞にはS. epidermidisが優位な菌形である。本研究では、菌糸の共存適正化をヒト角化細胞を用いて明らかにした。
【結果および考察】MOL1=400のS. epidermidis（MOL1）のM. restrictaを使用した。各々の菌系の菌種あるいは菌糸をヒト角化細胞に添加して細胞傷害性（LDH）を調べた。
【結果および考察】MOL1=400のS. epidermidis生存率とM. restricta生存率の共存試験では単独よりも高いLDH値を示した。S. epidermidis生存率とM. restricta生存率の共存試験では単独と一致したLDH値を示した。このことからS. epidermidis生存率の最大ピークが示されるのはM. restricta生存率の最大ピークと同じであった。S. epidermidis生存率とM. restricta生存率の共存試験では、M. restricta生存率の最大ピークが示される。
【考察】MOL1=400のS. epidermidis生存率とM. restricta生存率の共存試験では、M. restricta生存率の最大ピークが示される。

抄録（一般用）